

「地域の小学校へ入学」の報

先日、ある在宅重症児の母親から、この4月から地域の小学校（特殊学級：新設）入学の「正式に教委より連絡がありました」とのメールをいただいた。

この母親と知り合い、メール友になって約3年。この間、親として「子どもの未来を考えるとき、子どもが自分の生活の場であるこの地域の中で、義務教育を受ける事が最も重要かつ必要な事だと信じるからです」との相談も受けた。

他のメール友に意見を求めたところ、今の地域の小学校の障害児を受け入れるには十分でない人的、物的環境、また通学に伴う親の負担、障害児教育への教育界の十分でない取り組みの現状等から、「理念・理想だけで、母親を焚きつけるものではない」との忠告もいただいた。また、「障害児も地域の学校に入学するのは、当然のこと！」とのメールもいただいた。いずれにしろ、具体的には何の支援もできない私としては、養護学校、地域の小学校、いずれが望ましいかなど私見を一言も云わなかった。

ただ、地域の関係機関・者とこの件で係わり合う中で、母親として納得する方向を選択するように、また、結果はいずれであろうとも、地域の関係機関・者と係わり合うことは、将来のお子さんの地域で生活することへの理解者を増やす過程であり、そのことこそ大切なことと、アドバイしてきました。

お子さんが幼い時に係わり、母親と私を引き合わせてくれた保健師さんから、母親から連絡があったようで「良かったですね。阿部さんの支えのお陰！」とのメールをいただきましたが、具体的には何にも云わず、ただ母親の気持ちに寄り添ってきただけの私にすれば、こうしたメールに複雑な心境です。

これからの母親の日々の具体的苦勞が推測できるだけに、手放しでは喜べません。まだ、まだ私は、メール友として母親と係り続け、寄り添い続けることができればと思っています。

時代の流れでしょうか、こんなにも早くこの地域の関係機関・者が理解を示して下さるとは、予想だにしていませんでした。やはり、母の子を想う気持ちって凄い！の一言。

それだけに、「地域の学校での教育」という土俵に上がった訳ですから、教育行政機関、教師が、真に「教育」に向き合ってくれることを願うばかりです。この場をお借りし、ご意見をいただいた方々に、経過を報告させていただきます。

（2003年03月17日 記）